

## 生の可能性の共有に向かって：オーストラリア、アリス・スプリングスのリヴァー・キャンパー

飯嶋，秀治  
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2338966>

---

出版情報：九州人類学会報. 31, pp.42-42, 2004-07-17. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：

## 生の可能性の共有に向かって

—オーストラリア、アリス・スプリングスのリヴァー・キャンパー—

飯嶋 秀治

(九州大学大学院)

本稿における使命とは、①第四世界論をオーストラリアのフィールドに接続し、②この文脈下におけるオーストラリア先住民世界の独自性を描き、③以って、第四世界の人類学という問題に、新たな視角から寄与することである。以下、順次このプログラムに従って執筆を進める。

### I. 問 題

#### —「第四世界の人類学」と「アリス・スプリングスの先住民世界」の接続—

##### I-1 第四世界論

1960年代に、先進諸国が福祉社会化を果たしたことにより、国家が個人々の危機を支援するようになり、その意図せざる結果として、ライフスタイルなるものを自ら選べるあらたな個人主義が登場した、というベックらの再帰的近代化論は周知の通りである [ベックら 1994=1997]。ところがオーストラリアの先住民世界では必ずしも個人化に向わなかった。

狭義の「第四世界」論とは、こうした福祉国家化の後に第一世界に登場した先住民世界の政治・経済状況を概念化したものであるが、マヌエルとポランスは次のように論じて、その福祉国家化が、ある種の人々には必ずしも「個人主義」にならない様子を指摘している。「原住民世界は、これまで政治的に台頭するだけの力に欠けていた。彼らは経済力がなく、西洋の政治手法を拒絶していた。伝統的な生活形態を拡張し、向上させるために便利でない限り、彼らが西洋的な政治手法を理解することはできない。そして自分たち強みをむしろ西洋的な歴史概念の外部に見いだす。第三世界が東側諸国と西側諸国のあいだで格闘し、自分達の自由を維持することが可能となる政治力を実現させたのに対し、原住民世界は、彼らを包摂する東西諸国家の良識と道徳にほぼ依存しているのである」 [Manuel & Posluns 1974 出典はピーターソン 1999=2002: 264]。

実際、就労の見込みがない受動的年金生活者 *passive pensioner* という表現は、現在でもよく先住民世界を特徴づける言説として、英系定住民の会話で頻出する。けれどもそれは、単なる依存ではなしに、「彼らが完全な社会保障手当を現金で受け取るようになると、アボリジニの人々は自分たちの様々な社会活動を実行するのに十分すぎる資金を手に入れた。こうして先住民は、オーストラリア人の大多数が従事している通常の生産活動にかかわる必要なしに、自分たち独自の社会資本や象徴資本を自由に生産するようになったのである。／こうして、飲酒やトランプ遊びといった社会的な交流から、狩猟採集活動や儀礼の参加にみるアイデンティティの強化にいたるまで、アボリジニの人々の社会活動への関心は、以前にもまして強化される」という、社会福祉による自律を達成させ、先住民社会秩序の再生産を果たすことになったのである [ピーターソン 1999=2002: 269-272]。こうして、第四世界の再生産が問題となる。では、この文脈におけるオーストラリア先住民世界の独自性とは何か？

##### I-2 アリス・スプリングスの先住民世界

筆者が2000年から断続的に延べ2年程度フィールドとしてきた、アリス・スプリングス（以下「アリス」と略）は、大陸の7割以上が砂漠であるにも拘らず、その砂漠地帯のど真ん中に位置する殆ど唯一の都市であることから「荒野の首都」と呼ばれる。その歴史を、オーストラリア先住民政策史に沿って簡単に描くと、次のような表になる。

次期/年代/政策	
I 期/～1788/ 侵入以前	記録無し
II 期/1788～/ 無策の絶滅	1860～、初期探検隊到着 1880～、金の採掘→鉱山開発
III 期/1897～/ 保護・隔離政策	1899, Spencer & Gillen, The Native Tribes of Central Australia 出版
IV 期/1930～/ 同化政策	1930～、牧畜業の開始 ～1945、非先住民人口の一時 的急増 1960～、混成言語からなる19 のタウン・キャンプ設営へ
V 期/1972～/ 自己決定政策	1974～、政府関連機関業・観 光業登場

英系移民たちがこの土地にたどり着いた1860年代から90年代までは、オーストラリア国家が独立していないため、何ら統一的な政策さえなかった。その後、先住民の絶滅を前提とした保護・隔離政策、絶滅しないことが判明して後の同化政策の終末でようやく市民権を得、自己決定政策 self-determination policy 及び多文化主義政策 multicultural policy を採用したのが70年代以降のことである。

この間、二次世界大戦時の対日抗戦用に、オーストラリア南部から兵員をピストン輸送した時期にアリスの人口は一時的に急増し、同時に先住民人口も、質的・量的にも格段に増加したと推測される。具体的には、アリスの周囲には、アラント民族を中心として、ワルピリ、アマチェラ、アリアワラ、アンタカリチャ、アラバナ、ルリチャなどが既に居てそれぞれの領域に分散していたが、この時期にはこれらの周辺諸民族以上の多様な民族が大量にアリスに集まってきたため、アリスは都市の周囲に19ものタウン・キャンプを設営し始める。またアリスの経済は、今も基幹産業として鉱山開発・政府関連業・観光業が挙げられるが、特に観光業を念頭においた都市計画と先住民のタウン・キャンプの配置は相互作用して決定されてきたため、このタウン・キャンプ設営の動きを「ブラック・アウト」と呼ぶ研究者もいた位に政治化する。マボ判決が出てからは、土地返還が始まり、現在の先住民領 Aboriginal territory を形成するも、そこでは教育機関をはじめとする各種の社会資源が限られているため、そこに住まう人々も、

アリスを行き来することになる。現在、アリスには約27,000人の人口があるが、その約15%の4,000人前後が先住民人口であり、うち約40%は15歳以下の少年層である。

こうして、国家による社会福祉の充実と先住民社会の紐帯が相互作用してこそ、非先住民と比べ、識字率（非先住民の78%に比べ36%）[Northern Territory Department of Education 1999: 35]、学歴（非先住民の大卒40%に比べ10%）、平均収入（中流階級の非先住民収入の49.7%）、持ち家比率（非先住民の持ち家50%に比べ19%）[ATSIC 2001: 15-7]、平均寿命等が著しく低いのに対して、失業率、アルコール消費率、（特に軽犯罪の）逮捕率が著しく高まり、「開発途上未済」という第四世界状態に止められるのがアリスの先住民世界の独自性である。では次に、こうした世界を内側に立ち入ってやや詳しく見ることにしよう。

## II. 資料と解釈

### —アリスの先住民世界の独自性—

#### II-1 ブッシュ・モブ問題

アリスに住まう先住民は、元来アラント民族を中心としており、特に現在中央及び東アラントと呼ばれる言語集団は対外的親近性を保持していた。こうした中央—東アラントの諸集団も、その内部に入ると、主にムバントウア、アンドゥーリャ、イルンパといった3領域に分かれた生活圏があった。こうした経緯から、この中央—東アラントの諸親族が、現在でもアリスの先住民世界で、文脈的毎に「伝統的保有者」traditional owner とか「管理者」custodians、「称号保持者」title holder 等と呼ばれる。

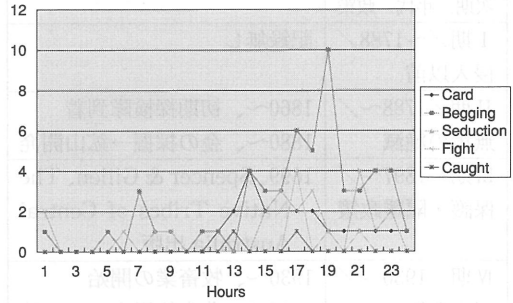
現在の先住民人口は約4,000人としたが、その日常生活は、住まいの形態を指標にすると、①持ち家、②借り家、③タウン・キャンプ、④野宿といった諸形態に別れている。①や②は就業者層というのが主要条件になるが、私の交際内では、上述したような中央—東アラントの人々は、ここに所属する傾向が見られ、他方、③や④には、季節就労から無職層が見られ、西アラントをはじめとする諸言語集団がここに所属する傾向が見られたように思われる。但し上述した歴史的経緯から、異言語間の婚姻は珍しくなく、親族の伝を辿って先住民領とアリスの間を行き来するため、人口は確定

しがたい。

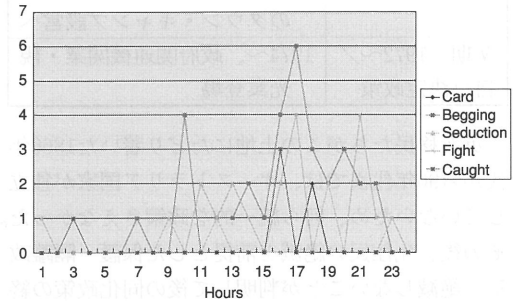
こうした全般的状況下で、アリスの先住民を「タウン・モブ（街の奴等）」town mobと呼ぶ文脈で、アリス外からの先住民を「ブッシュ・モブ（ブッシュの奴等）」bush mobと呼ぶ言説がある。ところがこの表現は、よく飲酒耽溺の報告書などに用いられることから分かるように、端的に地域的な命名ではなく、含意としては「先住民領から酒を飲みに来る奴等」「トラブル・メイカー」ということになる。実際、上述の①や②の住まいの形態を選択する先住民には、タウン・キャンプでの飲酒の上での問題を嫌って選択する先住民も多く、飲酒者而非飲酒者は、親族であれ相互に「別人」different people 扱いで言及されることも珍しくない。そこで、こうした意味での「ブッシュ・モブ」の概要をつかむために、筆者が季節別に1日24時間・1週間継続して行った中心街での調査を行った。

一時に街中にいる人数としては、最大で夏季125人前後、冬季は59人前後であり、1週間内では木曜日の年金支給日に最も多く、1日内では午前10時から午後2時に頻繁に見かけることを確認した。季節別に、この調査時に確認した諸行動（トランプ、物乞い、誘惑、喧嘩、逮捕）を統計処理すると、季節に依らず以下のような傾向が見られた。まず午前10時に銀行で年金を下ろすと、バーに行ったり、トランプを始めたりし、午後にそれが尽きると物乞いが起こり、夕暮れ近くになると異性の誘惑が始まり、その後で喧嘩が生じ、それに伴い逮捕される（右の表参照）。

こうした諸資料から、「ブッシュ・モブ」が実数としてはそれ程大きくなくとも、彼らが「トラブル・メイカー」と含意されることは直ぐに推察がっこう。「ブッシュ・モブ」は、先住民であるか否かにかかわらず、定職に就いている者であれば、①平日の、②日中から街を徘徊し、③屋外で飲酒し、あるいは喧嘩するという姿が、自らの対極にある姿として眼に映るであろう。こうして、先住民世界を問題視する雰囲気醸成されるのである。では次に、こうした「ブッシュ・モブ」の中でも極め付けに「反社会行動」を起こすと言われ易い「リヴァー・キャンパー」のより内側をやや詳しく見て行こう。



夏季行動統計



冬季行動統計

## II-2 リヴァー・キャンパー問題

「リヴァー・キャンパー」とは文字通り、アリスの中央を貫くトッド・リヴァーの河床（殆ど万年乾燥している）に起居する先住民のことであり、この意味では上述の「ブッシュ・モブ」の「問題」を代表すると思われるような先住民である。

筆者が延べ半年余り一緒に過ごしたりヴァー・キャンパーの一家は、主にアリスの西南西124km、先住民領にある遠隔コミュニティ、ハンメルスバーグ出身の西アラント達であり、当該のコミュニティは、エアーズ・ロック～（マウント・オルガ～）キングス・キャニオン～アリスという2泊から3泊のツアー・コースの中継地点でもある。

この一家は3世代からなっており、様々な理由で出入りはあったが、父母世代としてA（男、東アラント、65歳）とB（女、西アラント、46歳）がおり、Aが仕事休みの時、訪問したハンメルスバーグでBと出会い、カンガルー婚と呼ばれる同棲生活を始めた。東アラントへの帰路、子供が出来てアリスに居つくことになったが、以来、特にBが一家のペース・メイカーとなり、朝食や夜食の世話は彼女が見ていた。娘息子世代としては、3所帯あったが、C（男、西アラント、約45歳）

が、ハンメルスバーグに育ち、女を求めてアリスに来たところ、D（女、西アラント、約50歳）に会う。次に、E（男、西アラント、40歳）は殺傷事件が切っ掛けでハンメルスバーグを出たとも、婚出先のビジネス（儀礼）が多すぎて嫌になったとも言われていたが、いずれにせよアリスで3人の女性とカンガルー婚。AとBの息子F（男、西アラント、約34歳）も3人の女性とカンガルー婚した経歴を持っていた。彼らはそれぞれ、夏なら水汲み、冬なら薪集めで家族の生活を助けていた。孫世代としては、G（男、西アラント、約25歳）はCとDの息子でH（女、ピチャンチャラ、約20歳）と会いカンガルー婚していた（BはCEの親族呼称上の「母」である）。

この3世代のそれぞれが、ほぼ2週間に1度は、失業手当や育児年金をもらうので、この一家のように、出入りはあっても10人前後いれば、ほぼ日替わりでお互いを交代で面倒見ることができる。具体的に、Cの場合であれば、失業手当として隔週火曜に Aus\$340≒¥26,800を受け取り、飲酒に Aus\$260≒¥18,200/2週(約76%)を費やし、飲酒量は 26~38ℓ/2週≒1.5~2.8ℓ/日に上り、これを水割りにして飲むのである。

ここで飲まれる酒にも幾つかの嗜好性が認められるが、一家に好まれていたのは糖度の高いポート・ワインであり、彼らはこれを「モンキー・ブラッド」と呼称している。しかしこの高精度のワインをストレートかつ急ピッチで飲むことはまずなく、観光街であることから、土産物屋や飲食店の裏路地にどこにでもある蛇口で約2倍に薄め、各自が拾ってきたペット・ボトルに分配して、ゆっくりと飲むことで、酔いを浅く持続させるのである。一家にとって飲酒は自明化されており、BやDはやめていたが、切っ掛けは肝臓病で生死の境を彷徨う病院介護を受けたためであった。Cの手の震えは「病気」として認知されても、そこでモンキー・ブラッドは、こうした震えを抑える「薬」としてこそ語られる。彼らにとって「まずい」のは、ストレートでの飲酒や急ピッチでの飲酒、あるいは、飲酒の果てに「自らに語る」状態であり、モンキー・ブラッドの飲酒自体ではないのである。

こうして飲酒をしている前後に、誘惑や喧嘩が生じる傾向があるのは上で見た。けれどもその喧嘩の契機を見ていると、通例年金を支給された際、再配分するはずのものを何らかの理由で拒絶した

り、カンガルー婚のパートナーのいずれかが浮気の気配を見せたり、(先住民社会の)公衆の面前で相手を非難したりした際に生じやすい傾向があり、いずれも先住民の日常生活からすれば、「反則」的な行為が生じたときであることが多い。実際に、筆者がこの家族に限らず、直接観察した喧嘩相手の統計を見ると、全24件のうち、2/3は家族内(夫婦間7、兄弟姉妹間6、その他3)で生じており、家族外でのそれは1/3(先住民相手3、非先住民相手5)となり、通常、彼らの生活とは関りの薄い非先住民との喧嘩は、偶発的に20%程度生じているのに過ぎない。更に言えば、筆者の家族が眠っていた河床や岩丘とは、彼らが祖父母から受けついでいるドリミング・ストーリー(神話)に関連した場所であり、彼らにとってその場所に眠ることは、土地から世話を見られていると同時に、土地の世話をみる行為である。すると彼らに言われる「トラブル・メイカー/反社会行動」とは、誰に対する「トラブル」で、どの社会に「反」しているのか。

考えてみれば、先住民領のコミュニティは殆ど自治的に禁酒であり、アリスに来ても圧倒的多数の英系定住民都市の中で、タウン・キャンプは異言語雑居でトラブルを招き易く、借り家や持ち家では大抵飲酒せず、となれば、一家の神話に親密に関与する河床に住んで行う「物乞い」や「カード」といった諸行為は、「英系定住民」や「先住民」を相手とした最小限の接点で行われ、また「誘惑」や「喧嘩」といった諸行為さえ、「先住民」の中でも自らの「家族内化」「家族外化」といった日常生活の規則の共有を巡って生じているとなれば、それらはこの都市で自律的に生活する上で、自らとの親密な関係性を振り分ける行為に他ならず、彼等なりの問題解決の仕方といえよう。にも拘らず、それが「トラブル・メイカー/反社会行動」といった一般的な形で社会問題化されて流通しているのかを検討せざるを得ない。

### II-3 「トラブル・メイカー/反社会行動」言説の構成のされ方

そこで本節では、以上の2節の内容から言説の生産構造を振り返り、そこから第四世界の問題の所在を析出するためのキー・タームを提示して、結論に寄与させたいと思う。

真正性：こうした言説の生産者を考えるとき、まず念頭に浮かぶのが、上述した中央一東アランタで、持ち家住まいをしているような諸親族達である。彼らの慣習からすれば、西からやってきて河床に起居し（ゴミを散乱させ）土地の面倒を見ないこと、焚き火の際に生木を折ってまで採集すること、喧嘩等を起こして血の目を見ること等は、いずれもその慣習感覚に反する行為であり、こうして伝統的にこの土地の権威として内的にも承認されている彼らが、こうした言説を流通させていることは間違いない。けれども、それと同時に見逃せないのは、彼らを「伝統的保有者」「管理者」「称号保持者」といった「真正な」代表として承認する、タウン・カウンシル（町役場）を中心とした人々の存在である。

観光権力：アリスの基幹産業が、鉱山開発・政府関連業・観光業にあることは既に述べたが、鉱山開発も政府関連業も、需要が大きく広がることを望めないことを考えるなら、アリスのタウン・カウンシルが自らの産業開発のために観光業に力を入れるのは理解し易い。実際、アリスは1969年に「中央オーストラリア観光基本構想」の主要拠点として、エアーズ・ロック・ツアーへの観光客の受け皿として考えられていたし、1981年からノーザン・テリトリー州で成立した2km法（酒屋から半径2km内の公的な場所における飲酒禁止）は、そうした行動をとるのが実質上は先住民であることから、観光客や非先住民の眼を意識したあからさまな差別法である。こうした社会的な文脈で1990年頃から、「リヴァー・キャンパー」という言葉が新聞紙上でトラブル・メイカー／反社会行動として問題化されるのだが、それが「眼に見える範囲」に限られているのは、「キャンプ禁止」「飲酒禁止」などと書かれた看板が立っているのはトッド・リヴァーの中でもアリスを通過する領域や、岩丘部でも街中のその周辺に限られていることから明らかである。2002年から始まった、アリスの飲酒規制法もこの方針の延長線上で、飲酒の時間に規制をかけることで、飲酒の開始時間を遅らせて、人々の目に付きにくいようにするものであった。こうした人々がやはり「トラブル・メイカー／反社会行動」という言説を生産するにせよ、その主体が非先住民であることから、彼らが反慣習感覚としてリヴァー・キャンパー達を問題化しているのではなく、反観光因子としてのそれ

らを問題化していることは理解し易からう。

メディア権力：しかしここにもう一つ忘れてはならない要素として、メディアの布置の構造とでもいえる問題がある。アリスには、① Channel 7と言った非先住民主体のテレビ支局や、IMPA-JAと言った先住民主体のテレビ局、② ABC Radioと言った非先住民主体のラジオ局や、CAAMAと言った先住民主体のラジオ局、③1947年から創刊された『セントラリアン・アドヴォケイト』（週2回発行）や1990年に創刊された『アリス・スプリングス・ニュース』（隔週発行）と言った新聞メディアが存在するのだが、このうち①や②はアリスだけではなく、州やそれを越えた視聴者を意識しているので、アリス・ローカルのニュースは載り難い。そこで③が、アリス・ローカルのニュースを取り上げる唯一のマスメディアとなるのだが、「リヴァー・キャンパー」の「反社会行動」をはじめとして、先住民の飲酒者の写真を掲載し、「アボリジニ」の犯罪を報じ、上述の真正性を担う中央一東アランタたちが「トラブル・メイカー」に怒りにした写真を掲載し、それらが先住民内部の問題であるかのような構図で報じるのは、こうした地方紙であり、しかも、そこには先住民スタッフがおらず、アリスを含めたノーザン・テリトリー州の先住民識字率が、（1998年現在）非都市部の、英語を第2言語とする小学校5年生だと3%であること [Northern Territory Department of Education 1999: 35] を考えると、こうした記事は、当該の先住民の見知らぬままに、非先住民の間の言説を生産・流通させる重要な言説生産の一端を担っていることになる。第一世界の社会心理学に依れば、こうしたメディア・メッセージは、言説だけならば大きな効果を及ぼさないが、それが身近な人々の語りを通じて信頼性を付与されて起動し始めるという [池田 1995: 168-9]。筆者の観察では、アリスでこれを担うのが、先住民と関る事の多い警察やタウン・カウンシルといった公的機関の従事者と、タクシー運転手や飲食店のような私的機関の従事者の一部である。そして、こうした言説空間の中で、リヴァー・キャンパーを取り締まる警察やタウン・カウンシルの姿が約85%の非先住民人口の眼に映るのである。

### Ⅲ. 結 論 一生の可能性の共有に向かって—

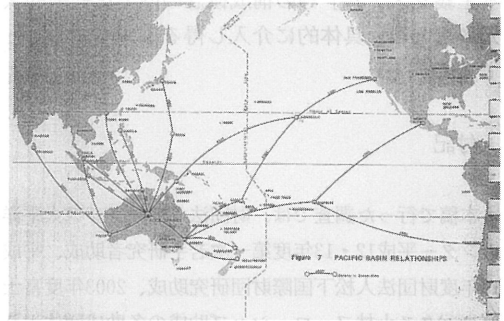
以上をまとめると次のようになろう。

アリスにおける先住民世界が、少なくとも過半数において、多民族混成、少年人口比の高さ、19の混成タウン・キャンプ、低識字率、低学歴、低収入、一部先住民の大量飲酒、高失業率、高速捕率、低寿命といった外的な指標に満たされていることは第1章で述べた。

次に、「プッシュ・モブ」や「リヴァー・キャンパー」の内側にやや立ち入った考察から、彼らが平日・日中・河床での飲酒から、先住民の問題視の雰囲気醸成されるのは確かだが、しかし、内実から言えば彼等なりの問題解決方が、「トラブル・メイカー／反社会行動」といった社会問題として認識される、その言説の生産を第2章で問題としてきた。

非先住民を主体とするタウン・カウンスルは、観光産業の開発を主眼とし、各種の規制法案が通過した後では、警察とともに飲酒嗜好の先住民を排除する権力を持つが、権威はない。そこで、反慣習感覚から怒りを顕にする真正性を担った中央—東アラントの代表者や組織の権威が求められ、「トラブル・メイカー／反社会行動」と地方紙による社会問題言説が形成されるのである。こうして一端、言説空間が組織化されるなら、街中でリヴァー・キャンパー達が、タウン・カウンスルや警察から排除される様子が見られようとも、それは予め正当化され、自明化した風景となり、ローカル・メディアの紙面では、真正な権威を持つ先住民と、真正な権威を持たない先住民との自閉的な問題であるかのように現象する。そこでは、先住民世界が数言語間を渡り歩くことで成立していたので土地への真正な権威は交渉に開かれていたことも、質量的な先住民の混成言語集団の急増が日本軍とオーストラリア軍の戦争に一因を持っていたことも、タウン・キャンプが郊外に配置されたことから就業して自家用車を持たない限り数キロの道を歩かねばならないことも、彼ら一家のコミュニティが観光開発のルート上にあったことから非先住民との貨幣を媒介とする関係を主に学んできたことも、これら一連の諸項目が、資源の少ないこのアリスに、国内外から観光客を呼び込もうという「観光」という名の世界資本主義システ

ム〔ウォーラーステイン 1995=1997〕の論理下で動いていることも、軽犯罪が増える前提として条例自体のおかしさも、疑うことがない空間が成立するのである。確かに彼らは社会問題だろう。観光への依拠を自明化した人々が、こうした疑問に耳を閉ざせば。



世界的観光資源検討 [Harris et al. 1969: 34]

第四世界の再生産といった問題を考えるとき、幾つもの問題がインター・ロッキングし得るので、各例は第四世界の境界線に生じる問題の変奏となり、相互の課題を先取りする形になる（その諸側面の幾つかは、以下の針塚・内藤の2論文で明らかにされよう）。こうした中で、拙稿のフィールドからの独自性とは、世界資本主義システム下での福祉社会化が辿った「第四世界産出」という問題が、「観光権力」と「メディア権力」といった力が「真正性」を用いて「社会問題」を「彼らの問題」として自閉的に構成する形で再生産する有り様を描いたことにあると言えよう。

オーストラリアに先住民政策とその背景の国策に顕著に現れているように、「自己決定(自己決定政策)」と「民族自決(多文化主義政策)」という両機制が循環的に回転し始めると、そこには調査者に顕著に現れるような外部からの関与を締め出す閉鎖系が形成されてしまう。そうした調査に携わる者には、フィールドからも研究者からも殆ど避けがたく「お前は問題を解決(実践)したいのか、それとも解消(理解)したいのか」といった貧しくクリティカルな場所に立たされることになる。そこで我々には錯綜する状態(錯綜帯)に留まる覚悟が必要とされる。それは直ぐに言説上の決着はつくかもしれないが「貧しい解決」しかもたらさないような方向を避け、直ぐに答えは出ないかもしれないが「豊かな悩み」をもたらすような方向を選んで介在的に理解して応えてゆくこ

と。そうすることで現状の「第四世界」から、一つの「生の可能性の共有」をする関係へと移行すること。またこうした理念の下で、状況的な行為に介入してゆくこと。これを、本稿の考察を踏まえたうえで次なる課題へとつなぐ、筆者の読者への提案としておきたい。次なる課題とは、「世界資本主義システム」等の構成概念の内実を経験的次元に落とし、具体的に介入し得る工夫をすることである。

#### 付記

本稿で行った調査では、財団法人福岡アジア太平洋センター平成12・13年度第一次若手研究者助成、平成13年度財団法人松下国際財団研究助成、2003年度富士ゼロックス小林フェローシップ助成の各助成団体よりご支援を賜った。ここに記して深謝する。

#### 参考文献

ATSIC 2001 *Annual Report 2000-2001: Alice*

*Springs Regional Council. Asprint*

池田謙一 1995「マスコミュニケーション」『現代心理学入門4 社会心理学』（安藤清志・大坊郁夫・池田謙一）pp.165-184、岩波書店。

ウォーラーステイン、イマニュエル 1995=1997『新版 史的システムとしての資本主義』川北稔訳、岩波書店。

Northern Territory Department of Education 1999 *Learning Lessons: An Independent Review of Indigenous Education in the Northern Territory.*

Northern Territory Department of Education

Harris, Kerr, Foster, and Co. 1969 *Tourism Plan for Central Australia.* Harris, Kerr, Foster, and Co.

ピーターソン、ニコラス 1999=2002「近代国家の中の狩猟採集民」『多文化社会のなかの先住民』（保苺実訳、小山修三&窪田幸子編）pp.261-83、世界思想社。

ベック、ウルリッヒ・ギデンズ、アンソニー&スコット・ラッシュ 1994=1997『再帰的近代化』（松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳）而立書房。